

P-247 子宮体部悪性腫瘍のMRI : Gd-DTPA  
造影法による鑑別

兵庫県立成人病センター

竹森正幸、市村隆也、出馬晋二、山口聡、  
山崎正明、西村隆一郎、大津文子、長谷川和男

[目的] MRIが子宮体癌のstaging診断に有用であるという報告は数多くみられるが、肉腫など他の子宮体部悪性腫瘍のMRIについての報告はほとんどみられない。そこで体癌と他の体部悪性腫瘍症例のMRI所見を比較して、子宮体部悪性腫瘍の補助診断法としてのMRIの有用性について検討した。[対象・方法] 手術により診断の確定した体癌40例（Ⅰ期30例、Ⅱ期5例、Ⅲ期5例）、癌肉腫4例、内膜間質肉腫1例、平滑筋肉腫2例を検討対象として、1.5T超伝導MRI装置を用いて、SE法にてT1強調像、T2強調像、Gd-DTPA造影T1強調像を全例に撮影した。また癌肉腫症例において、組織学的な癌腫成分と肉腫成分の分布状態と画像上の輝度とを比較検討した。[成績] T1強調像では、体癌と癌肉腫で子宮は全体に無構造の低輝度を示したが、内膜間質肉腫と平滑筋肉腫では体部に出血と思われる高輝度部分が認められた。T2強調像では、体癌の34例(85%)が筋層に比べてほぼ均一な高輝度を示し、6例(15%)がほぼ均一な低から等輝度を示した。それに対して、癌肉腫と平滑筋肉腫では低から高輝度までの多彩な輝度を示す領域が不規則に混在して認められた。造影T1強調像では、体癌は全例、Gd-DTPAによる造影効果が弱く、筋層に比べてほぼ均一な低輝度を示したが、平滑筋肉腫では不均一に造影され子宮の層構造が判然としなかった。また、癌肉腫では、組織学的に癌腫成分が豊富に存在する部分はGd-DTPAによってほとんど造影されず低輝度を示したが、逆に、肉腫成分が豊富に存在する部分は非常に強く造影された。[結論] MRIでは体癌と肉腫疾患とは異なった所見を示し、特にGd-DTPA造影MRIはそれらの鑑別診断のひとつとして有用な検査法と考えられた。

P-248 Primitive neuroectodermal tumor (PNET)  
と診断された巨大子宮腫瘍の一例

愛知医大

渡邊東洋彦、澤口啓造、山田英史、野口靖之、  
平田正人、野口昌良、中西正美

PNETは、neural crest由来の軟部組織腫瘍であり、小円形細胞肉腫の組織像を呈するが、胎児型横紋筋肉腫、Ewing肉腫、神経芽腫、悪性リンパ腫の組織学的特徴を欠く例として1980年に報告された。そして、子宮を原発とするものは極めて希であり、世界的にも報告は極少ない。今回我々は、急激に増大する腹部腫瘤を主訴として婦人科を受診し、術後特殊免疫組織化学染色によりPNETと診断された症例を経験したので報告する。症例は、48才、1回経産婦であり、内診および超音波断層法にて子宮は成人頭大に腫大していたが、過多月経、月経困難症等はなく、貧血も認めなかった。術前の画像診断で、子宮後壁に18cm×16cmの充実性腫瘍が確認されたが、急激な腫瘤増大と血中LDHが1409 IU/lと極めて高値であったことより子宮肉腫を強く疑った。開腹術を行い、子宮体部後壁に軟らかい成人頭大の腫瘤を確認し、破綻した内容物は暗赤色、軟性組織であった。両付属器を含めた単純子宮全摘出術を施行し、肉眼的には腹腔内に明らかな残存腫瘍は認めなかった。病理組織診断で、腫瘍組織は核クロマチンをもつ、胞体のほとんどない小型の異型細胞とやや大型な核と比較的広い胞体を持つ腫瘍細胞の増殖を認め、小型の腫瘍細胞には、ロゼットの形成を確認した。特殊免疫染色では、CD99(MIC2)は強陽性、NSEも陽性で、Keratin、Desmin、S-100、Chromogranin Aは陰性であり、臨床病理学的には子宮を原発としたPNETと診断された。術後、血中LDH値は、正常化し、全身状態も良好であるが、現在、化学療法を施行中である。